夢の母語，幻の祖国（ワタン）

岡　真理

『由熙』という作品は，「言語」について語った小説でもあります。人間にとって「言語」とは何でしょうか。私は現代アラブ文学を専攻し，大学でアラビア語を教えたりしていますが，「語学」というと，人間が使う道具（ツール）として「言語」が外在的に存在するような印象を与えます。人間という「主体」がまず，あって，その外部に言語が存在し，それを道具として使用する，という考え方です。しかし，人間にとって言語とは，自分の存在とは切り離されて，外在的に存在するものなのでしょうか？　そうではなく，言語とはむしろ人間存在に内在するものなのではないか，というのが私の個人的な言語観です。でも，それは，「思考」という人間存在個々にとって内的な営みが，言語の存在を必要としているから，ではありません。その場合も，言語は，思考を可能ならしめる一種の「ツール」，思考する人間主体とは別個の存在として意識されていると思います。私が申し上げたいのは，言語とは，人間の身体感覚そのものなのではないのか，ということです。

私はかれこれ人生の半分以上をアラビア語とともに生きてきました。アラビア語には母音が３つしかありません。ア，イ，ウの３つです。人生の半分以上，アラビア語とともに生きてきて，私の耳はアラビア語の耳になってしまいました。どういうことかと言うと，母語であるはずの日本語を聞いても，アラビア語で区別しない母音を耳が弁別しないのです。私にとって日本語は母語のはずなのに，アラビア語において弁別されないイとエ，ウとオの音を，私の耳はもはや，かなり意識的にならないと弁別しないのです。身体器官がいつのまにか，そのように変容してしまったのです。これを耳の機能的な「退化」と呼ぶと否定的なニュアンスになりますが，逆に，身体がアラビア語のアフォーダンスを獲得したのだとポジティブに捉えることもできるかもしれません。

10年ほど前，アラビア語，アラブ人，アラブ世界そのものを拒絶したくなるようなできごとを体験しました。アラビア語を教えることは，私にとって生活の糧を得ることでもありましたので，アラビア語に触れないですまそうにも，そうすることができず，たいへんしんどい思いをしました。アラビア語が私にとって，単なる道具的なもの，テクニカルなものであったなら，おそらく，それほどしんどくはなかったのではないかと思います。私が感じたしんどさとは，自分の身体それ自体が，アラビア語の身体に変容してしまっていて，私にとってアラビア語はもはや，教科書を開いて，そこに書いてあることを教えればいいという外在的なものではなく，自分の身体感覚，もっと言えば，私が生きる身体そのものと同一化してしまっている。拒絶したいと思っても，自分の感覚に同化してしまっているがゆえに，それから逃れられないという苦しさです。

今日は藤井たけしさんが，李良枝の総作品を概観してくださり，また，寺下さんが，『由熙』

という作品を「言葉」にこだわる形でお話しくださいました。私は，ちょっと違う観点から，「言葉」という問題にこだわって『由熙』という作品について考えてみたいと思います。
さきほど，金友子さんのお話の中で，祖国というものは幻想にすぎないのだという指摘がありました。私も金友子さんとはまたちょっと違う文脈で，「幻の祖国（ワタン）」ということを考えているのですが，その前にまず，ひとつの詩をご紹介しましょう。インドのナラヤム語の詩人の言葉です。

> I speak three languages, I write in two, and I dream in one…
> 私は三つの言葉を語り，二つの言葉で書き，そして，たったひとつの言葉で夢を見る・・・・・・

ここでいう三つの言語とは，イギリスによるインド植民地支配の結果として話されるようになった英語，そして，ナラヤム語ともう一つ別のインドの言葉です。二つの言語で書く，というときの言語，それは英語とナラヤム語を指します。では，一つの言葉で夢を見る，というときの「一つの言葉」とはどのような言語なのでしょうか。英語のことでしょうか？　ナラヤム語のことでしょうか？　それとも，書き言葉には用いない三つめの言葉のことでしょうか？私たちはいったい，何語で夢を見るのでしょうか？　もし，私たちが夢を見るときの言葉を「母語」と言ってよければ，母語とは，いったいいかなる言語なのでしょうか。

『由熙』という小説については，この作品は，母語（日本語）と母国語（韓国語）に引き裂かれた由康の葛藤，苦悩を綴ったものであるという読み方がなされます。そのとき，由熙の母語が「日本語」であることは，自明なものと考えられています。でも，ほんとうにそうなのでしょうか？私たちがたった一つの言葉で夢を見る，その夢の言葉をこそ「母語」と呼ぶならば，由熙の母語，そして，私たちにとっての母語とは，それほど自明のものなのでしょうか？

言語学的には，「母語」というジェンダー化された表現より，「第一言語」というニュートラルな言い方のほうが好まれます。人間が習得する第一言語とは必ずしも「母の」言葉であるとは限りません。それを「母の」言葉と呼ぶことはさまざまな政治的，イデオロギー的負荷を帯びており，そうした観点から「母語」という呼称自体が批判されています。しかし，私がここであえて，「母語」という言葉を用いるのは，それが，単に人間が習得する第一言語とは異なる，「夢の言語」のことが念頭にあるからです。

『由熙』という作品は，講談社の文庫版では『ナビ・タリョン』と一緒に収録されています。『ナビ・タリョン』を読むと，私の印象ですが，『由熙』という作品はその陰画のように思えてきます。『ナビ・タリョン』も『由熙』も，主人公はどちらも在日2世の女性です。けれども，両者のありようは対照的です。『ナビ・タリョン』が描くのは，ある種の修羅と化した家庭です。両親は離婚訴訟をしていて，肉親をめぐる家族の葛藤，愛憎がある。主人公の女性には日本人の愛人がいて，性的な関係もある。家を飛び出した主人公は宿で賄い女中をしたのち，最後には韓国に旅立ち，そこで舞踊を学びながら「ウリマル」で――韓国人の娘たちに「あなたの発音はおかしい，そんな発音では別の意味になっちゃう」と笑われながら――歌います。それに対して，『由熙』という作品においては今，申し上げたような，『ナビ・タリョン』とうい物語

を構成する要素のすべてが欠落しています。『ナビ・タリョン』を読むと，『由熙』という作品に何が「ないのか」ということが見えてきます。

たとえば，由熙は，「日本社会の中にいて差別されることもなかったし」と言います（もちろん，主人公が，そう語っているからといって，その言葉を私たちがそのまま信じてはいけませんが）。とはいえ，どうやら由熙は，『ナビ・タリョン』の主人公とはぜんぜん違う家庭環境で，『ナビ・タリョン』の主人公が経験するあらゆる修羅とは無縁に，繭のなかの幼虫のように庇護されて育ったように思われます。最も特徴的なのが，「性愛」（セクシュアリティ）に関してです。『ナビ・タリョン』では性愛そのものが描かれています。抱かれたいという主人公の欲望や感覚が描かれているのですが，『由熙』という作品は，極めて脱「性」化された，脱セクシュアリティの作品です。由熙は大学生のはずなのですが，読んでいると，彼女の印象は中学生くらいにしか思えない。とても子どもっぽくて，庇護を求める存在です。韓国で由熙がようやく安らぎを見出した家庭，それは，由熙が「オンニ」（姉さん）と慕う，小説の語り手と，その叔母が二人で暮らす家庭です。母娘ではなく，叔母と姪が暮らす家というのも象徴的ではないでしょうか。叔母と姪のつながりは，直接，セックスに媒介されていません。母と娘という，関係性の根底に直接，異性間の性愛が存在する人間関係ではない，女たちの，セックス不在の人間関係の中に由熙はいます。叔母に夫はおらず，オンニも適齢期を過ぎても結婚していません。作者は注意深く，性愛につながる要素をこの家庭から消し去っています。

由熙は韓国語で「ウリナラ」（我が言葉）という言葉を口にするたびに，自分が嘘をついているような思いにとらわれ，それが彼女の苦しみの根底にあるわけですが，この，「嘘をついている」という思い，裏切りの感覚はどこからくるのでしょうか。書かせたら，文法的には完璧な韓国語を書くのに，話すとなると，由熙は，「ウリマル」を，きわめて稚拙な形でしか話せない。「我が言葉」を話すとき，それがおのずと「わたしの言葉」でないことを意識せざるを得ない。「わたし/たちの言葉」を，わたしの身体が裏切り続けるのです。稚拙な形でしか話せないウリマルそれ自体が，ウリマル（我が言葉）は「わたしの言葉」でないことを物語ってしまう。同胞に稚拙な発音を笑われながら，声高らかにウリマルで歌う『ナビ・タリョン』の主人公とは正反対です。

また，由熙は，韓国の伝統楽器，テグムの音が好きなのに，自分からは決してそれを吹こうとはしません。なぜなのでしょうか。彼女にとってテグムの音は何を象徴しているのでしょうか？

みなさんはテグムの音を聴いたことがありますか？『由熙』という作品を理解するためには，テグムという楽器がどのような音を奏でるのか，それに触れなければ大切なことが分からないのではないかと思い，あるとき，お願いして，実物を見せていただき，その音を聞かせていただいことがあります。それは，か細い，むせび泣くような音でした。でも，なぜ，テグムだったのでしょう。朝鮮の魂を感じさせる楽の音なら，チャンゴ（鼓）でもよかったのではないでしょうか？由熙が愛した楽器，でも，自分では奏でることができなかった楽器，それが，チャンゴ，あるいはその他の打楽器ではなく，ほかならぬテグムであるのは，この楽器が，言語と，それを話す人間との関係性のメタファーであるからだと思います。テグムは管楽器です。自らの呼気によって，音を奏でます。それは，気管を流れる呼気によって言語が発せられるのと同

じです。テグムが吹けない，というのは，ウリマルが話せない，呼気を発するその時点で躓いてしまう由熙と言語の関係を表しているように思います。

でも，テグムの音は一体何語なんでしょうか。楽器の奏でる音を「何語」と問うことなど，ナンセンスだと思われるかもしれません。でも，だとしたら，なぜ，私たちは，言葉に関して，そう問うてみることをナンセンスとは思わないのでしょうか？

私たちはえてして言葉というものを，常に「何語」,「何語」と分けて考えます。ソシュールが言う「ラング」――日本語，韓国語というような――ナショナルなラングに分けて発想しがちです。

「由熙」という言葉は，漢字で書けば，漢字文化圏の人間はそれで了解します。でも，音で読むと，韓国語では「ユヒ」，日本語では「ユキ」と，ラング間の対立が生じます。一方,「私は『ユヒ』です」と言った時，この固有名としての音としての「ユヒ」は何語なのでしょうか？

私の名前は「マリ（真理)」ですが，あらゆる言語の人が，私を「マリ」と呼びます。英語で話していても，アラビア語で話していても,「マリ」です。このときの「マリ」はいったい何語なのでしょうか。アラビア語で話している人たちにとって,「マリ」というその部分だけは日本語なのか，それともアラビア語を話している中で発せられる「マリ」はアラビア語で，英語で話しているなら英語になるのか。そう考えてみると,「固有名詞」は，ラングのある種の決定不能性，ナショナルなラングを超えるようなものとして存在していると言えるのではないでしょうか。

セクシュアリティという問題に関して言えば，たとえば性愛の最中に漏らすため息は，何語なのでしょうか。あるいは，性愛の最中に漏らす相手の名前は何語なのでしょうか。このようなことを考えるのは，言語をつねに「＊＊語」「＊＊語」とラングに分類しようとする強固な発想が社会的に存在する一方で，言語を生きる私たちは，さまざまな局面において，特定のラングに還元されえない，決定不能な言葉を交わし続けている，ということに注意を促したいからです。

数週間前に京都で「ガーデン」というイスラエル映画の上映会がありました。イスラエルのテルアビブの街に,「ガーデン」と呼ばれる地区があり，その路上を，セックスワーカーの人たちが仕事場にしています。映画の主人公は，そのガーデン地区で街娼として生きる，パレスチナ人の二人の青年です。その一人，ニノは，エルサレム出身のパレスチナ人ですが，エルサレムはイスラエルによって併合されたため，ニノは，行政的にイスラエルのIDを持っています。もう一人のドゥドゥは，イスラエルの占領地であるパレスチナの村の出身です。パレスチナ人である二人は，アラブ・イスラム社会の出身です。ホモセクシュアルを禁忌とするイスラーム社会において，ゲイである二人は迫害の対象になります。ドゥドゥに関しては，彼がもともとゲイであったかどうかは分かりません。父親によるすさまじい暴力に耐えかねたドゥドゥは，9歳の時，家出をして，拾ってくれた男性にレイプされ，そういう道に入っていくことになったのです。家庭がなく，ふらふらしていたドゥドゥは，イスラエルの協力者と見なされてパレスチナの刑務所に入れられます。2002年にイスラエル軍が西岸に大侵攻を仕掛け，刑務所が攻撃された時，ドゥドゥは脱走します。脱走して，イスラエル軍はパレスチナ人である彼に発砲

し，刑務所の方は脱走者である彼に発砲し，両方から攻撃されて，そのとき彼が選んだのはイスラエル軍に逃げ込むことでした。彼はパレスチナ人であるけれども，パレスチナ側からイスラエル協力者――つまり，祖国の裏切り者――と疑われていて，パレスチナに行ったら殺されてしまうからです。協力者と見なされ，同性愛者であるということで迫害され，彼は，テルアビブに不法滞在しながらイスラエル人男性を相手に身体を売って生きていきます。ニノもそうです。二人は恋人同士ですが，お互い客をとるし，客だけでなく自分が寝たいと思う相手とも寝る。排他的な異性愛の対極を生きています。二人の祖国パレスチナは，イスラエルによって抑圧されていますが，そのパレスチナに，二人の居場所はありません。イスラエルのユダヤ人社会の中でヘブライ語を使って生きることによって初めて，二人の安全が確保されるという，たいへん皮肉な状況にあります。

監督はイスラエルのユダヤ人です。監督がカメラを向けている時，彼らはヘブライ語で話をしますが，二人だけになって，監督の存在を意識しない時はアラビア語になります。ドゥドゥが西岸にいるお母さんに電話をする時は，まさに母の言葉である母語のアラビア語を話しますが，しかし，彼の母語の世界は，彼がゲイであるということで，西岸に帰ってきたら命さえも保障しない世界です。反対に，民族的にはパレスチナを抑圧しているイスラエルの社会の中で，路上生活をしている若者たちのケアをしているソーシャルワーカーとヘブライ語で会話をすることによって彼は，初めて自分の存在をいたわり，ケアしてくれる人に接し，ヘブライ語の中で安らぐことができるという状況です。ドゥドゥは，あるいはニノは，何語で夢を見るのでしょうか？暗殺されたパレスチナ人の作家，ガッサーン・カナファーニーは小説『ハイファーに戻って』において，「祖国（ワタン）とはこのようなことのすべてが決して起きないということなのだ」と主人公に語らせています。カナファーニーの言葉に倣えば，ゲイであるがゆえに迫害され，祖国の裏切り者だと見なされて処刑されるかもしれない，あるいは，生きるためにからだを売り続けなければならない，そのようなことが決して起きないこと，それが「祖国（ワタン）」なのだ，ということです。だとすれば，ドゥドゥやニノが夢見るワタン（祖国）では，何語が話されているのでしょうか？

ある種のナショナリズムから見たら，彼らは何重にも「裏切り者」です。ゲイであることでイスラームを裏切り，ヘブライ語を話すことで，そして，単に話すだけでなく，ヘブライ語の中で安らぐことで，二重，三重に彼らはナショナルなものを裏切っています。彼らは自分たちの社会から「対イスラエル協力者」と見なされていて，祖国に帰ることもできない。複数の言語，とりわけ侵略者，占領者，抑圧者の言語を自らの言語として話す者たちは，侵略された側，支配された側から見ると，民族の裏切り者にほかなりません。

メキシコの神学者であるコルテスに奴隷として差し出され，通訳となったマリンチェという女性がそうでした。今回の連続シリーズの第１回シンポジウムの時のテーマであった知里幸恵もまた，アイヌ語と日本語を自らの言語として東京帝国大学という帝国主義的な「知」に協力しました。金田一京助をコルテスと見なさないことによって知里幸恵を「裏切り者」と見なさない，そういう心的態度が北海道にある，ということが，そのとき，議論のなかで指摘されました。でも，その前提には，金田一がコルテスであるなら，知里幸恵はマリンチェである，裏切り者である，侵略者の言語を話し，侵略者に「愛」を感じる者は民族の裏切り者である，と

いう論理が同じように存在しています。金田一がコルテスではない，と否定する論理では，知里幸恵を，「民族の裏切り者」とする論理から真に解放することはできません。知里幸恵を「民族の裏切り者」から解放するには，マリンチェを「裏切り者」と見なす論理それ自体から，私たちが解放されなくてはなりません。

侵略者の言語が強制されるという状況の例をもうひとつ挙げましょう。テレサ・ハッキョン・チャの『ディクテ』においてテレサの母親は日本語という，植民者，抑圧者，侵略者の言語を民族的に強制され，それに対して闘います。『ディクテ』には，テレサの母を通して，あの時代，たしかに存在した，母語，そして母国語の側からの抵抗が描かれているわけですが，しかし，他方で，侵略や占領という情況のもとで，女たちは生き延びるために侵略者，占領者と，たとえば結婚し，侵略者の子どもを産むことによって，侵略者の言語を自らの胎内にとりこんでいくこともまたあったのではないかと思います。そこには，彼女たちがそうせざるを得ない侵略，あるいは占領という暴力のもとでの強制性という問題があり，決して，彼女たちの能動的主体性のみに還元できないことはもちろんですが，同じように，全体的な強制性をもって，彼女たちの能動的主体性を否定してしまうこともまた，できないと思います。彼女たちのなかには，侵略者，占領者の男を心から愛した者たちもいたでしょう。

つまり，娘の母語を裏切る母の問題です。子どもを抱えて女たちが生き延びようとする時，生き延びるために抑圧者，侵略者の男と一緒になり，侵略者の子どもを孕み，産むこともある。その子どもは侵略者の社会の中で，侵略者の言語を「母語」として育っていく。そして，その中でいつしか母の言葉自体も変容していくのです。最初の連れ子，侵略者によって養女とされた娘の母語と，侵略者とのあいだに生まれた息子の母語と母の言語がどんどんズレていく。その時，娘が，父系の出自によって規定されるネイションに思いを持っていれば，母はそれを裏切った存在となっていく。

日本語という言語が植民者，侵略者によって強制されたものとして，それに対する母語の側からの抵抗を『ディクテ』は語りますが，しかし，テレサの母親のそうした抵抗とはまた違う，ある種の女たちの生き方が，植民地主義の中ではあるのではないのか。いつの間にか――それこそ，私の耳がいつのまにか母語の耳ならざる耳に変容していったように――母の母語自体が変容していく，「母語」の身体を裏切るような経験です

母語とはどういうものなのかについて，トリニダート・トバコの詩人，マルレーヌ・ヌルベーヌ・フィリップが，母語なるものが赤ん坊に受肉される瞬間を，「言語の論理に関する言説」という詩に書いています。

「赤ん坊が生まれると，母はその生まれたばかりの子どもを抱き寄せた。その身体のすみずみまでなめ始めた。子どもは少しぐずったけれど，母の舌が自分の身体により速く，より強く押し当てられると，静かになった。母は舌で子どもをあっちへ，こっちへ転がしながら赤ん坊の身体をくるんでいた白いクリームのような物質をすっかりきれいにしてしまった。母はそれからその指を子どもの口に含ませた。そっと子どもの口を押し開いて，舌で子どもの舌にふれ，その小さな口を押し開いたまま息を吹き込む，勢いよく。彼女は言葉を吹き込んでいた。彼女の言葉，彼女の母の，母の言葉，そしてそれ以前に存在したすべての母たちの言葉を，自分の娘の中に」。

マルレーヌ・ヌルレーヌ・フィリップはこの詩で，生まれたばかりの仔ネコが，母ネコの舌によってなめ上げられていくようなものとして，母語が，赤ん坊に身体化されていくようすを描いています。母語とは，赤ん坊の口を押し開いて，その中に母やその母たちに連なっている女たちの記憶を，母語として受肉させるのだと。ここでは，母語の受肉が，極めてエロティックに，性愛と重ねられるようなものとして描かれているわけですけれども，しかしながら，私たち自身は決して，生物学的な母の言葉のみを，自らの「母語」としてもらい受けるわけではありません。言語形成期にある赤ん坊なり幼児なりは，その身体に触れる者たち，語りかける者たちすべての言葉によって，まさに身体をなめ回され，口を押し開かれ，その口の中にさまざまな言葉を吹きこまれていくわけです。それは，決して，排他的なひとつの言葉ではないはずです。私たちが言語形成期に触れる者たちすべての雑多な言葉，それこそが，私のほんとうの母語です。母語とは実は，きわめてpromiscuousなもののはずなのです。

もし，私たちが夢で見る時の一つの言語が母語であるとするならば，その母語というのは，果たして，ある特定のラングとして分節されるような一つの言語なのでしょうか。森崎和江さんはそのエッセイの中で，朝鮮にいた時，自分を背負って子守歌を歌ってくれた朝鮮人の乳母の背中のあたたかさ，ぬくもりを書いておられます。森崎さんの母語の中には，朝鮮人の乳母が彼女に語りかけた朝鮮語の言葉たち，音たちもまた，必ずやあったはずです。でも，植民地主義の暴力が刻まれた歴史によって，それを，「私の言葉」だと，「母語」だと呼ぶことは禁じられています。朝鮮人の乳母のぬくもりが，日本の朝鮮植民地支配によって，朝鮮人の子どもから日本人が掠め取ったぬくもりであるように，言語がナショナルなラングとして分けられているかぎり，乳母の語る朝鮮語の言葉たちもまた，それを「私のことば」と呼ぶとしたら，掠めとられたもの，ということになります。それら朝鮮語の言葉たち，「朝鮮語の」といような限定もないまま，「わたし」のからだをなめまわし，わたしの口のなかに吹き込まれたそれらの言葉たちを「わたしの言葉」，「わたしの母語」として語ることができるのは，夢のなかだけです。そして，人間にとって「祖国」とはそのことを意味するのではないのか。もう，お分かりいただけましたでしょうか。私が，これまで，さまざまな例を挙げて語ろうとしてきたもの，それは，森崎和江さんが，朝鮮人の乳母の背中で聴いたであろう朝鮮語の子守唄，それもまた，まぎれもない自分の母語なのだと語りうる，そのようなトポスへと私たちが開かれゆく可能性はどこにあるのか，ということについて，です。『ナビ・タリョン』の最後，主人公が，身体化された日本語の影響を被った拙い「ウリマル」をそれでも「わたしの言葉」として歌い，軽やかに舞うとき，ワタンがその瞬間だけ幻のように，この世に具現しているように思えてなりません。

私たちは，たとえばダブルの子どもの言語活動について，「バイリンガル」，すなわち二つのラングの話者であると言ったりします。大人である私たちは，言語形成期にある子どもの話す言葉を聞いて，そこに，「＊＊語」と「＊＊語」という二つのラングを区別して聴き取ってしまうわけですが，でも，話している子ども自身は，二つの言語が混在しているなどという認識はないままに話している。そこに私たちが二つのラングを指摘するのは，あくまでも私たちがラングを弁別できるからであって，それを話している子ども自身は，決して二つのラングであるとかは認識していない。だとすれば夢に見る一つの母語，夢の祖国というのは，極めて不節操

に，不純にさまざまなラングが混在しているものである。母語とは，常にすでに不純なものとしてある，母は常にすでに娼婦として存在している，そのようなものとして夢の祖国の母語はあるのではないか。そう考えると，朝，目覚めたとき，最初に口をついて出る「ア」が日本語の「ア」なのか，韓国語の「ア」なのかという由熙の問い，カナファーニーをもじって言えば，祖国とはそのような問いが決して起こらないところのこと，だということになるでしょう。母語が必然的にpromiscuousなものであるとするならば，由熙が徹底的に脱性化された存在として描かれているのも納得できます。